

P-Fスタディ母一子場面における 刺激構造の検討

藤 田 主 一

Rosenzweig が創始した P-F スタディ (Picture-Frustration Study) は、心理学的なパーソナリティ・テストの中の投影法 (projective method) に属している。投影法は、被験者に比較的あいまいな絵や図形、文章などの刺激材料を与え、それに対する被験者の自由な反応からその人のパーソナリティ像を把握する方法である。投影法における理論的仮説は、人間はある場面 (その人のパーソナリティが問われるような何らかの解決課題が与えられている場面) に置かれると、そこに示された外的刺激に対して無意識のうちに自己の内面を投影し意味づけるというものである。

P-F スタディは、ロールシャッハ・テスト (Rorschach Test) や TAT (Thematic Apperception Test) と並んで投影法の代表的なテストの一つであるが^{1,2)}、それは Rosenzweig が自身の欲求不満理論を検証するために考案したので、テストとしての理論的背景と構成に特徴が認められる。彼の理論の基本は、いわゆる個性的事象界 (idioverse) と呼ばれる自我の独自性や力動性を主観的な反応から捉えることで、人間のパーソナリティを理解する立場にあったといえる。その際に問題となるのは、この主観的な反応を客観的なベースに置き換える指標である。P-F スタディは、Rosenzweig のこうした考え方を基本にして構成されたのである。

さて、P-F スタディには日常生活場面においてごく普通に経験される24種類の軽い欲求不満場面が選択されていて、被験者の主観的な反応から、その人の力動的なパーソナリティが探られるように工夫されている。P-F スタディは広く臨床的な領域に使用され、同時にパーソナリティ理解の用具としての有効性を高めているが、2つの刺激材料つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激が外的に、そして同時に与えられていることから、かなり場面ごとの状況決定因 (situational determinant) が強く、そのために反応の自由度が低くなることも事実である。

P-F スタディの各場面に対する反応は、アグレッションの方向 (Directions of Aggression) とアグレッションの型 (Types of Aggression) という2次元のカテゴリーに分類される。さらに、アグレッションの方向は他責的 (Extraggession, E-A)、自責的 (Intraggession, I-A)、無責的 (Imaggession, M-A) の3方向に、アグレッションの型は障害優位 (Obstacle-Dominance, O-D)、自我防衛 (Ego-Defence, E-D)、要求固執 (Need-Persistence, N-

P) の3型に分類される。これらの相互の組合せにより基本的には9種類の評点因子 (Scoring factors) の成立が可能であり、24場面を通しての評点因子の出現頻度ならびにその特徴や反応転移などの推移から、その人のパーソナリティを浮き彫りにすることで、主観的反応を客観的で科学的な標準へと導くのである^{3,4)}。

ところで、P-Fスタディが制限的な投影法といわれるのは、上述のように2つの刺激材料つまり漫画風の絵画刺激と左側人物の言語刺激がセットになっているので、各場面の絵画刺激の情報だけでなく、言語刺激からの情報に反応が影響を受けるいわば二重構造になっているためと思われる。従って、被験者が自身の反応水準を内的あるいは外的なものに合わせるかは、ひとつに各場面の刺激特性に関わっている。P-Fスタディの場面特性については、例えば成人用では林⁵⁾、児童用では西川・一谷⁶⁾や林・一谷・西川⁷⁾などの先行研究があり、それぞれ標準法との関係から各場面の妥当性が検討されている。本研究においては、P-Fスタディ児童用の中から特に母-子場面^{8,9)}を選択し、各場面を構成している刺激構造の意味を検討する。

研究 I

【目的】

P-Fスタディ (日本版) 児童用から、①母-子の対話場面を選択し、②言語刺激を除いた絵画刺激のみを設定し、どのような場面の内容が想定されるのか、またどのような対話が遂行されるのかについての資料を提出する。

【方法】

1. 被験者：本研究に参加した被験者は、神奈川県藤沢市内の公立小学校6年生で、最終的な被験者数は合計30名で、全員女子である。

2. 検査材料：本研究で用いた検査材料は、P-Fスタディ児童用24場面の中から、絵画刺激と言語刺激の内容、および従来の研究報告を考慮して選択された母-子の対話場面と想定される10場面である。最終的にこの10場面を選択する過程において、秦¹⁰⁾の研究などを参考にしている。ここでは、全24場面について左側人物は右側人物から見てどのような関係になるか (父、母、先生、友人など) を出現率の上から検討された。今、試みに全24場面を欲求不満に陥れる人 (欲求阻止者：Frustrater) と欲求不満に陥れられる人 (被欲求阻止者：Frustratee) に分けて示すと、おおよそ表1のようなパターンになる。

本研究の対象になるP-Fスタディ母-子場面とその言語刺激は以下の通りである。

場面 1 「お菓子は兄さんにあげたから、もう1つありませんよ。」

場面 4 「困ったわね。その自動車私には直せないわ。」

表 1 欲求阻止者の年齢水準・性別と、被欲求阻止者の性別による
P-Fスタディ児童用場面の分類

欲求阻止者 左側人物：Frustrater		被欲求阻止者 右側人物：Frustratee	
年齢水準	性別	男子	女子
成人（年配者）	男子	11 13	5
成人（年配者）	女子	④ ⑩ ⑭ ⑮ ⑰ ⑱ 22 ⑳ 24	① ⑦ ⑯
仲間（同年齢者）	男子	6 9 12 20	3
仲間（同年齢者）	女子	2 18	8 21

注 1) 表中の数字は児童用場面の場面番号である。また、○印がついている数字は、本研究で用いられる場面を指している。

注 2) 年齢水準は、右側人物と比較してのものである。

注 3) 場面 6 は、左側人物の年齢水準に対して「年上の子」「友人」といった人物認知が高率を占めていることから成人とは考えにくいので「仲間」として分類した。

注 4) 場面 11 は、左側人物を「父」「兄」とする人物認知が高率を占めていることから「成人・男子」として分類した。

注 5) 場面 17 は、人物認知を「両親」とするのが一般的だが、言語刺激の内容を検討した結果「成人・女子→母」として分類した。

場面 7 「あなたは悪い子ね。うちの花を摘んだりして。」

場面 10 「悪いことをした罰に、押入れに入れて悪かったね。」

場面 14 「そんなところに隠れて、何をしているの。」

場面 15 「けがはしなかったかい。」

場面 16 「あなたのボールを取ったりして、この小さい子はいけないわね。」

場面 17 「出かけるから、寝て留守番していてね。」

場面 19 「また寝小便したのね。小さい弟よりだめじゃないの。」

場面 23 「おつゆが冷めてしまって悪かったわね。」

上記10場面のうち、場面 1、場面 4、場面 10、場面 15、場面 16、場面 17、場面 23 は自我阻害場面 (Ego-Blocking Situation) で、残りの場面 7、場面 14、場面 19 は超自我阻害場面 (Super-ego-Blocking Situation) である。また、場面 7、場面 10、場面 16、場面 17、場面 19 には社会的適応性を見る GCR (Group Conformity Rating) 評点が設定されている。

ここでは、左側人物が発している吹き出し部分の言語刺激 (母-子場面は上述の「 」内の文章) を抜いて空白にした P-Fスタディ児童用紙を用意した。用紙の上欄には、場面内容が書けるように () を付している。

3. 手続き：検査は小グループで実施された。被験者は絵画刺激のみ提示された例題を前にして概ね以下の教示を与えられた。“これからやり方を説明します。全部で3つのことをやってく

ださい。ここに示した絵は、左側の人と右側の人が何かお話をしているところです。(1)これはどんな場面でしょう。上欄の()の中に、場面の内容を書いてください。(2)この2人の人はどんなお話をしているのでしょうか。吹き出しの中にそれぞれ書いてください。(3)お話はどの人が先にしたのでしょうか。先にお話した人に○印をつけてください。”

教示終了後、場面1から順次記述を求めた。回収後に1人ひとりの反応内容を調べ、無反応等が見られた場合には、個別に呼び出して誘導しない程度に再度の記述を求めた。

【結果と考察】

1. 絵画刺激の場面認知について

表2は、被験者が全24場面をいかなる状況と認知したのかをその記述(対話の具体的な内容ではない)に沿ってまとめたものである。その内、母-子場面については場面番号に下線を付した。母-子場面の特徴を列記しよう。

- (1) 場面1：標準法では「お菓子がもらえない→欲求不満」の場面だが、絵画に示された場所が台所のようなため、“食事等のお手伝い”との場面認知が強い。
- (2) 場面4：標準法では「自動車を直してもらえない→欲求不満」の場面だが、玩具が壊れる前の“子どもが自動車で遊んでいる”状況を捉えた認知が一般的である。ただ、“勉強・テスト”を想定した誤認ともいえる反応は理解できないが、それは、仮説的ではあるが“遊んでばかりいないで勉強しなさい”という日常生活の体験かもしれない。
- (3) 場面7：標準法では「花摘みの叱責→欲求不満」の場面だが、絵画刺激からの情報が多いため“花採り・摘み”を指摘する認知のほかに、子どもの行動を“プレゼント”行為の表現と認知している。
- (4) 場面10：標準法では「押入れに入れられた→欲求不満」の場面だが、これは大きく2つに分類できる。1つには被験者の体験などが影響しているためか“叱られている”といった認知であり、2つには押入れの中で“かくれんぼ”をしているところを見つけたというものである。
- (5) 場面14：標準法では「隠れているのを見つけられる→欲求不満」の場面だが、被験者には状況をよく理解できない場面らしく“その他の解釈不明”が圧倒的に多い。状況的には場面10と類似している点もあり、同様に“叱られている”“かくれんぼ”という反応が見られるが、言語刺激がなければ場面認知は難しい。
- (6) 場面15：標準法では「階段から落ちた→欲求不満」の場面だが、これは絵画刺激からの情報のみで場面の状況が即座に判断できるため、“階段から落ちた”等の認知である。
- (7) 場面16：標準法では「自分のボールを取られた→欲求不満」の場面だが、一般的に捉えられる場合は、“遊ぼうとする”“遊ぶのを頼まれる”である。これも被験者の体験の影響かも

表 2 P-Fスタディ児童用絵画刺激における場面認知の内容(全24場面の実数値)

場面	発話 左側	人物 右側	場面認知(被験者の記述内容に準拠) N=30
①	11	19	食器の用意・片づけ→8, お手伝い→6, おやつ→5, つまみ食い→4, お菓子→3, 台所→2, その他→2
2	28	2	遊び・遊んでいるところ→20, 返してもらう・貸してもらう→3, その他→7
3	19	11	居残り勉強・勉強→8, 学校・教室→8, 残されている・居残り→7, その他→7
④	23	7	遊び・遊んでいる→7, 親子・母子の会話→6, 場所(部屋など)→4, 勉強・テスト→2, その他→11
5	4	26	おもちゃ屋・お店・人形屋→12, 買物→8, おねだり→6, 誘拐→2, その他→2
6	7	23	仲間・友達に入れて→7, 野原・広場→6, 仲間はずれ→3, いじめ→3, けんか→2, その他→9
⑦	5	25	花採り・花摘み→16, 場所(庭など)→6, 親思い・プレゼント→3, その他→5
8	19	11	人形が壊れた・バラバラ→12, 部屋→7, 会話→5, けんか→4, 片づけ→2, その他→0
9	21	9	じゃんけん→8, 遊び・遊んでいる→8, ビー玉・おはじき→7, 言い争い→3, ゲーム・かけ→2, その他→2
⑩	26	4	怒られ・叱られている→11, かくれんぼ→8, 押入れ→5, その他→6
11	26	4	太鼓を叩く・鳴らす→8, 太鼓の練習→5, 太鼓→5, けんか→3, その他→9
12	22	8	出会い→7, 立ち話→5, けんか→4, 遊び→3, あいさつ→2, その他→9
13	26	4	どろぼう(柿・りんごなど)→14, 怒られ・叱られている→9, 庭→3, その他→4
⑭	30	0	怒られ・叱られている→6, 隠れている→4, 母子の会話→3, 部屋・押入れ→3, その他→14
⑮	9	21	階段から落ちた→10, 階段→6, 落ちた→3, ケガ→2, その他→9
⑯	25	5	遊び→9, 出会い・あいさつ→5, けんか→4, お願い・頼み→2, お姉さん→2, その他→8
⑰	21	9	病気・風邪→13, 寝ている→5, 死→3, 出かけるところ→3, その他→6
18	21	9	けんか→9, 出会い→5, 遊び・遊ぶところ→3, 立ち話→3, 場所(道端など)→3, その他→7
⑲	21	9	おねしょ→11, 寝るところ→7, 布団たたみ・片づけ→5, 怒られ・叱られ→2, 朝起きる→2, その他→3
20	18	12	コマまわし→10, 勝負・競争→6, コマ→5, コマ遊び→4, 遊び→2, その他→3
21	3	27	ブランコ→14, 遊び・遊んでいる→6, 借りる・貸してもらう→4, 公園→2, その他→4
22	15	15	遅刻→19, 学校・教室→8, その他→3
⑳	15	15	ご飯(朝・夕)→13, 食事→7, 食べ始め・食べている・食べ終わり→6, その他→4
24	8	22	図書館・図書室→12, 呼び出し→5, 本を借りる→4, 校長室→2, 先生→2, その他→5
全体	423	297	

注 1) 場面欄中の○印の数字は, 母一子場面の10場面を表している。

注 2) 発話人物の数字全体は, 30人×24場面=720である。

注 3) 発話人物の左側は母, 右側人物は子を表している。

しれないが、子ども同士の対立と親の介入を想定した“けんか”場面を想定できる。

- (8) 場面17：標準法では「一人で寝て留守番→欲求不満」の場面だが、子どもが寝ている姿から想像するのは“病気”である。左側人物の要請とは受け止められない。
- (9) 場面19：標準法では「夜尿を叱られる→欲求不満」の場面だが、言語刺激の助けがあってその状況がよく理解できると思われた。即ち、日常の“寝る”に関係する内容であると思われるが、被験者の場面認知は“おねしょ”が最頻度であった。布団を前にして自分より小さい子どもとの対立があると、このように感じてしまうのであろうか。
- (10) 場面23：標準法では「食事が冷めた→欲求不満」の場面だが、状況はともあれ母親から“食事”の世話を受けていることには間違いない。

標準法では言語刺激の助けもあって、左側人物と右側人物との関係や欲求不満に陥った状況をつかむことができるが、絵画刺激のみの場合は必ずしも同様の認知が遂行されているとは限らず、“認知のしやすさ”に水準がある。例えば、場面1や場面14などでは、絵画刺激からの情報は標準法が構成している枠組み通りではなく、言語刺激の付随があって解釈できる。場面7や場面17などでもその状況が反応を引き出す好例だろう。ところで、母-子場面ではないが、例えば場面6、場面12、場面18などのように人間関係の情報だけが設定されている場合には、表2を見る限り場面の認知が“親和”と“攻撃”に分かれるようである。いずれにしても、日常生活で体験している場面との相互性が、絵画の中に投影されていることには間違いない。

2. 対話内容について

左側人物（母親）からの発話とその後の対話の展開にどのような影響を与えるかについては、場面展開性の観点からの研究¹¹⁾があるが、ここではその1例として場面1でのやり取りの方向から対話がどのように終結されていくのかに着目したい。場面1では母→子へと対話が進む場合が36.7%で、その展開は「こらっ、何しているの!」「ちょっと、〇〇して」といった叱責や命令、また動作の制御要請が多く、それに対して子どもは当惑や従順な応答をする。子→母へと対話が進む場合は63.3%で、母親への依頼要求が多く、これに対して母親の終結応答は「〇〇しなさい」「〇〇するのよ」といった指示的な口調を取りやすい。発話の内容が①隣の人（右側人物とは限らない）を非難するの否か、②自分を内省しているの否か、③単なる状況の説明に終始するの否かは、被験者自身の体験的なエピソードに依存することになる。また、場面16において母→子へ対話が進む場合には、子は母の発話に対して言い訳と受け取れる応答が多い。これも、日常のエピソードの中で最終的な結末に“謝罪”を取ることが求められている事実を思わせる。

3. 対話の方向について

標準法は左側人物→右側人物への対話の流れを基本に構成されている。全24場面の傾向では左側人物→右側人物の方向が58.8%、右側人物→左側人物の方向が41.2%である。個々の場面別に

見ると、右側人物→左側人物の方向へ対話が展開する傾向が認められたのは場面5、場面6、場面7、場面15、場面21、場面24とあってよいだろう。また、表2の中から、母-子場面全体の傾向を取り出すと、母→子が186数値(62.0%)、子→母が114数値(38.0%)となり、母親からの発話が展開しやすいことを物語っている。特に場面14は発話者がすべて母親である。対話内容を別にしても、①それぞれの人物に自分を投影してその場面を解決する条件が異なること、②スムーズな展開に一定の方向がうかがえることが理解できる。

研究 II

【目的】

P-Fスタディ(日本版)児童用母-子場面における絵画刺激の特性については、研究Iで検討した。ここでは、言語刺激のみを抜き出した場面を設定し、それらに対してどのような場面遂行が想定されるのかについての資料を提出する。

【方法】

1. 被験者：本研究に参加した最終的な被験者は、神奈川県藤沢市内の公立小学校5,6年生の女子37名である。

2. 検査材料：本研究で用いた検査材料は、研究Iと同様、P-Fスタディ児童用24場面の中から、絵画刺激と言語刺激の内容および従来の研究報告を考慮して選択された母-子の対話場面と想定される10場面である。母-子各場面から絵画刺激を除き、言語刺激だけを抜き出して新しい質問票を作成した。質問票は、B4判の紙に横書きで、場面1から順に発話を縦に並べ、それに続いて回答するための()が用意されている。

3. 手続き：検査は小グループで実施された。被験者は言語刺激のみが印刷された質問票の例題を前にして、概ね以下の教示が与えられた。“これからやり方を説明します。つぎの例題を見てください。「あなたの書いた絵、あまりじょうずではないね」という言葉(文章)があります。ふつう、人からこんなふうに言われたら何と答える(言い返す)でしょうか。言い返すだろうと思う答えを()の中に書いてください。思いついた答えでよいのです。”教示終了後、例題を含めて場面1から、順次回答を求めた。

【結果と考察】

1. 反応語のスコアリングについて

本研究で主張する母-子場面は筆者が設定したものであり、また、質問用紙には情報としての絵画刺激が存在していない(言語刺激のみである)ので、被験者にとってその場面が母-子のや

表 3 P-Fスタディ母-子場面（言語刺激）における反応語の評点因子（％）

場面	E'	E	<u>E</u>	e	I'	I	<u>I</u>	i	M'	M	m	E-A	I-A	M-A	O-D	E-D	N-P
1	17.6	35.1	0	16.2	0	0	0	13.5	5.4	2.7	9.5	68.9	13.5	17.6	23.0	37.8	39.2
4	17.6	0	0	29.7	0	8.1	0	23.0	0	21.6	0	47.3	31.1	21.6	17.6	29.7	52.7
7	5.4	2.7	13.5	8.1	5.4	47.3	10.8	6.8	0	0	0	29.7	70.3	0	10.8	74.3	14.9
10	10.8	25.7	0	1.4	0	24.3	0	0	18.9	18.9	0	37.8	24.4	37.8	29.7	68.9	1.4
14	2.7	6.8	24.3	0	0	0	0	0	66.2	0	0	33.8	0	66.2	68.9	31.1	0
15	17.6	2.7	0	0	71.6	0	0	0	8.1	0	0	20.3	71.6	8.1	97.3	2.7	0
16	43.2	2.7	0	0	2.7	5.4	0	0	21.6	23.0	1.4	45.9	8.2	45.9	67.5	31.1	1.4
17	10.8	35.1	29.7	8.1	0	0	0	0	0	4.1	41.9	54.1	0	45.9	10.8	39.2	50.0
19	0	37.9	0	0	0	16.2	10.8	5.4	0	0	0	67.6	32.4	0	0	94.6	5.4
23	0	5.4	0	32.4	8.1	2.7	0	13.6	32.4	2.7	2.7	37.8	24.4	37.8	40.5	10.8	48.7
全体	12.5	15.4	6.8	0.6	8.8	10.4	2.2	6.2	15.3	7.3	5.5	44.3	27.6	28.1	36.6	42.0	21.4

り取りか否かは不確実であるが、そこから得られた反応を評点カテゴリーに置き換える作業を行った。表 3 は、母-子の10場面における各反応を標準的な評点因子にスコアリングした時の出現率である。なお、被験者の反応をスコアリングできないものはなかった。標準法では、絵画刺激の助けもあって左側人物と右側人物との関係や、欲求不満に陥った状況をつかむことができるが、言語のみの場合は必ずしも同様の見方がされているとは限らない。そこで、標準法（絵画刺激と言語刺激）において算出している各場面ごとの評点因子の多数反応出現率³⁾と、表 3 に提出した反応出現率とを数値の上で比較してみる。本研究の被験者は小学校5,6年生なので、標準法において提示された10~11歳（5,6年生と表示している）にあたる。

- (1) 場面1：標準法ではE' (36%)、e (33%) が多数反応であるのに対して、ここではE (35.1%)、E' (17.6%) となり、同じ他責的反応の中でも言語刺激のみでは他罰反応を取りやすい。
- (2) 場面4：標準法ではe (53%) が多数反応であるのに対して、ここではe (29.7%)、i (23.0%)、M (21.6%) がほぼ等しく出現する。これは絵画刺激による場面認知（母と子の状態）に影響されたのかもしれない。
- (3) 場面7：標準法ではI (75%) が圧倒的な多数反応であるのに対して、ここでも同じくI (47.3%) が高出現率であるが、アグレッションの方向はI-Aが70.3%となり標準法に満たない。絵画刺激が存在した方が、より自責的な反応に方向づけられるものと思われる。
- (4) 場面10：標準法ではI (56%) が多数反応であるのに対して、ここではE (25.7%)、I (24.3%) ばかりでなく、M-Aも37.8%を占めることから、言語刺激のみの反応では方向がはっきり捉えられない。
- (5) 場面14：標準法ではM' (58%) が多数反応であるのに対して、ここでもM' (66.2%) が高い。場面の意味が比較的はっきりしているので、被験者は容易に無責逡巡反応を意識しや

すいものと考えられる。

- (6) 場面15：標準法では統計数値が示されていない（有意な反応がない？）が、ここではI' (71.6%) の自責逡巡反応が高率で、当惑的な反応を引き出しやすい。
- (7) 場面16：標準法ではM (50%) が多数反応であるのに対して、ここではE' (43.2%), M (23.0%) の順である。言語刺激は状況の許容ではなくアグレッションの強調を意図させるはたらきを持つらしい。
- (8) 場面17：標準法ではm (58%) が多数反応であるのに対して、ここでは同様のm (41.9%) とE (35.1%) が類似する。標準法は場面の状況（寝ている姿）を読み取ることができるが、言語刺激のみでは母の一方的な強要と受け取って他罰反応を出現しやすくなると解釈できる。
- (9) 場面19：標準法ではI (70%) が圧倒的な多数反応であるのに対して、ここではE (37.9%), E (29.7%) とE-A反応が高い出現率を示す。標準法では謝罪を求められるような設定と受け取られるが、言語刺激の場合には叱責の個所が特に強調されて認知すると解釈できる。
- (10) 場面23：標準法ではM (43%) が多数反応であるのに対して、ここではe (32.4%) とM' (32.4%) が同率であり、Mはわずかに2.7%にすぎない。この場面も言語だけでなく母の姿勢（絵画刺激）がM反応を引き出していると理解される。

2. 若干の反応内容について

表3に示された評点因子の出現率の他に、ここではそれ以外に得られた情報を2つ取り上げたいと思う。

- (1) 場面15：標準法では容易に階段から転落した子どもを母親が気づかう場面と読み取れるが、言語刺激だけの場合には、発話者と一緒にケガをしたかのような状況を思わせる場面認知が見られた。従って「うん、しなかった」という反応は、解釈上の意味が異なる。
- (2) 場面16：標準法ではボールを取った小さい子どもを非難し、右側の子どもを擁護する状況認知が行われるが、ここでは“この小さい子”という刺激語が被験者自身に向けて放されたと誤認され、それがE, I', Iなどの反応として投影される。

母-子場面全体では、他責的で自我防衛型、評点別ではE, M', E'などの反応語が多く認められた。

標準法の統計に時間的な差異（標準化の時期）があることを認めざるをえないが、投影法の目的である“刺激提示のあいまいさ”を考慮した場合に、偏った反応を引き起こしやすい場面構造と、絵画刺激と言語刺激のいずれに影響を受けて反応するかという場面構造との両面から捉えなおす必要があるように思われる。

<引用文献>

- 1) 藤田主一：「心理学教科書とP-Fスタディ」。城西大学女子短期大学部紀要，1990，7，1，129-140.
- 2) 藤田主一：「心理学教科書に扱われたP-Fスタディの現状と課題——特に，教育心理学教科書を中心に——」。城西大学女子短期大学部紀要，1991，8，1，161-182.
- 3) 住田勝美・林 勝造・一谷 彊ほか：「P-Fスタディ解説——1987年版——」。三京房，1987.
- 4) 秦 一士：「P-Fスタディの理論と実際」。北大路書房，1993.
- 5) 林 勝造：「投影法の基礎的研究——投影法の研究方向の考察と，それにもとづいたP-Fスタディ」。風間書房，1976.
- 6) 西川 満・一谷 彊：「P-Fスタディの刺激性質の場面別検討」。日本教育心理学会第21回総会発表論文集，1979，856-857.
- 7) 林 勝造・一谷 彊・西川 満：「P-Fスタディの刺激性質の場面別検討（II）」。日本教育心理学会第22回総会発表論文集，1980，538-539.
- 8) 藤田主一：「P-Fスタディ母-子場面における母親の期待水準に関する比較研究」。城西大学女子短期大学部紀要，1986，3，1，57-70.
- 9) 藤田主一：「欲求不満場面における子どもの役割期待に関する研究——特にP-Fスタディ母-子場面について——」。城西大学女子短期大学部紀要，1989，6，1，115-133.
- 10) 秦 一士：「P-Fスタディにおける児童の人物認知と言語反応の関係」。日本心理学会第38回大会発表論文集，1974，510-511.
- 11) 藤田主一・高橋秀和：「P-Fスタディの場面展開性に関する研究」。日本心理学会第49回大会発表論文集，1985，442.